

**●京都工芸繊維大学 工芸科学研究科造形工学専攻、造形科学専攻
「建築リソースマネジメントの人材育成」の事例 <理工農系>****具体的に何を実施したのか**

建築の保存・再生の事業に実際に参加する問題解決型のフィールド実習をプログラムの中核としたが、その実習の中で、参加する事業で必要となる知識・技能を有する分野の複数の教員が指導にあたるようにしたことと、さらに、実習現場で実際に事業に携わるさまざまな分野の技術者、研究者も指導者として参加いただき、きわめて多面的な指導体制を構築することができた。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

上記フィールド実習において、参加する学生が、自由に成果の書き込みができるWeb のシステムを構築し、さらに成果報告書の中にも自分が獲得したと思われる知識・技能を書き込ませる欄を設けた。これは、実習の情報発信などの意義もあるが、それ以上に、多面的な指導体制が実際に有効なものとなっているかの検証のために設けた仕組みである。実際に、実習を修了するごとに、これらのデータから指導体制の検証を行った。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

広範な分野から参加する多面的な指導体制は、基盤となる建築学だけに閉じるのではなく、歴史学、博物館学、都市計画学など広い分野へ学生の視野を開かせることに確実に繋がった。上記のWeb のシステムや成果報告書での学生の発言から、そのことは十分にうかがえる。とりわけ、保存や再生の事業を担う行政や施設管理者の指導と議論は、学生が、この分野の仕事の意義の大きさを体験的に学ぶことに大きく貢献した。学生の報告には、事業が単に技術的やデザイン的な課題だけで実施できないことを理解するものが多かった。

●京都工芸繊維大学 工芸科学研究科造形工学専攻、造形科学専攻
「建築リソースマネジメントの人材育成」の事例 <理工農系>

具体的に何を実施したのか

台湾、タイ、ベトナムなどのアジア、フランス、マケドニアなどのヨーロッパ、そして京都と西日本各地の国内と、まさに国内外で行われている建築や都市、集落の保存や再生事業に参加することをフィールド実習とし、それを教育プログラムの中核とすることで、実践的な知識と技能を身に付けさせることができた。地域だけでなく、町家、町並み、集落、近代建築、景観など事業の対象となるものも広範なものに取り組んだ。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

保存・再生の事業は、その場所の伝統、風土、民族性などにより大きく異なるものとなる。そのために、それぞれの実習の現場では、単に物理的な保存・再生の技術やデザインだけでなく、その場所の歴史や環境についても学ばせ、さらにそこで事業者や研究者の指導もおおいだ。また、できる限り、学生たちが学んだ事項や、保存・生成へのアイデアを現地で発表させ、現地の住民や行政組織と議論する場も設けた。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

地域だけでなく、保存・再生の対象となるものも広範なものに取り組んだことにより、学生は、事業の多面性を理解することとなった。さらに、上記のように、現地の歴史や風土の個別性についても学び、それが保存・再生の方向性を決めることを理解するようになった。そのことは、実習を自由に報告する Web システムや報告書の記載においても、よく表れている。とりわけ、旧植民地や他民族支配の経験がある地域での保存・再生の困難さと可能性について認識したことがわかった。

**●京都工芸繊維大学 工芸科学研究科造形工学専攻、造形科学専攻
「建築リソースマネジメントの人材育成」の事例 <理工農系>****具体的に何を実施したのか**

建築の保存・再生の分野では、新たな職能開発が求められる。そこで、教育の場から問いかけ、職能確立を進めるためのシンポジウムを積極的に実施した。まず、建築リソースマネジメントという新しい概念を持ち込んだために、その概念の妥当性を問う必要から、建築歴史とその保存の分野で第一人者として活躍してきたフランスワーズ・ショエ氏を中心に、内外の研究者を招いた国際シンポジウムを開催した。翌年は、実際に保存・再生の現場をリードしてきた実務者を招いたシンポジウムを実施し、3年目には、そうした事業をどのように教育プログラムに落とし込んで行けるのかについて、米国およびオランダの研究者・教育者を招いた国際シンポジウムを実施した。

実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと

建築や資料の保存・再生は、社会的ニーズはあるものの、これまでの産業界で職能として確立したものとはなっていない状況がある。ここでのシンポジウムは、その職能確立に向けた取り組みとして実施したものである。そのため内容は、教育で必要となる技能や知識に関するものではなく、保存や再生の概念的課題（第1回）、実務的課題（第2回）、教育的課題（第3回）に関するものとした。

どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか

教育内容の知識や技能ではなく、その職能確立をめぐるテーマとしたシンポジウムであったが、教育プログラム参加学生だけではなく、建築の保存・再生に関わる関係者が数多く参加し、この教育プログラムの重要性、社会的意義を改めて確認することとなった。とりわけ、最終年の教育に関わる国際シンポジウムはメディア関係者も含め100名を超える参加があったが、学生からは海外（特に講演いただいたオランダ）の建築をめぐる状況と、保存・再生にむけた教育の取り組みに、自分たちの目指す仕事は国際的に重要な課題であることが実感できたなどの意見が寄せられた。